

## 特集：予防

## 予防・教育・地域

### —臨床心理士の視点からエイズ・性教育を考える—

高田 知恵子

創造学園大学ソーシャルワーク学部

## 1. はじめに

筆者は臨床心理士・HIVカウンセラーとして活動する中で、HIV感染予防（以下、予防）の重要性を強く認識し、エイズ・性教育にも関わってきた。HIVカウンセリングの中では、多くのHIV感染者（以下、感染者）が「予防のためであれば自分の例を話してくれても良いです」と語ってくれる。筆者は、感染者の内面に触れるHIVカウンセラーの立場から、感染者ケアと予防の重要性について、機会のある毎に伝えている。感染者へのケアと予防はHIV対策の両輪である。感染者へのケアがあってこそ、予防が真に可能になる。宇野（2004）<sup>1)</sup>が指摘するように、医療者や行政が自分を守ってくれると確信できた時、受診行動、相談行動が取られ、それがひいては感染防止につながるのである。さて、本稿では臨床心理士と地域の保健師や教職員との連携によるエイズ・性教育を報告し、今後のエイズ・性教育について考えてみたい。

## 2. 地域での予防教育

## 1) 保健師との協働

① A市B区における中学校への予防教育：筆者は2002-2004年にかけて保健師と協働で、B区内中学校で予防教育を実践した。保健所の保健師は担当地区の状況をよく把握している。例えば、C中学校の地区は養育環境が十分ではない家庭を抱えている。D中学校の地区は共働き両親が多い、等々である。B区保健所は区内の中学校校長会に働きかけ、生徒への健康教育事業「命の教育」（禁煙教育、妊婦疑似体験、エイズ・性教育が含まれる）を紹介し希望校を募った。保健師は、申し込みを行った学校の校長、養護教諭から、対象学年や内容について要望を聞き、講師と内容について調整した。HIVカウンセラーの立場から感染者の心理面も含めて話して欲しいとの要望も出た。講演の前に事前アンケートとして生徒にHIV・エイズのクイズに答えてもらい、意識を高める工夫をした。クイズの回答は講

演直後に配布し生徒自身に正誤を確かめてもらった。会場には予防ポスターを掲示し雰囲気作りに配慮した。講演は「おとなになるための準備—HIVカウンセラーからのメッセージ」というテーマでスライドを用いて進めた。内容については後述するが、抗体検査については、保健師が保健所での検査の受け方について具体的に説明した。講演後に事後アンケートを実施し、講演内容の理解度を評価した。図1は地域における臨床心理士と保健師の協働の状況を表したものである。

② 盲学校・養護学校：保健師は特殊教育の学校にもつなぐ役割を果たしてくれている。エイズ・性教育に関しても置き去りにされがちな生徒たち（宮崎2001）<sup>2)</sup>へもメッセージを伝えるようにしている。盲学校では、コンドームなど教材を手にとり触れることで、予防を実感してもらえた。身体障害を持つ生徒たちは受診の機会が多いという経緯もあり、エイズという病気を知りたいという意欲が旺盛であった。また発達遅滞の生徒に対しては、性被害に遭わないためのスキル、また性的に不審に思われないためのスキルを学習する機会にして欲しいという要望が教師から出された。それを受けて「自分を守る、他の人を大切にする」という観点から具体的に、視覚的に伝える工夫を行った。生徒向けの講演の後、教職員向けにエイズの現状について話し、さらに生徒たちの性に関する指導で日常苦労している点について討議する時間を設けた。

## 2) 教職員との協働

筆者がスクールカウンセラーとして赴任していたT市R小学校では、エイズ・性教育に熱心な校長からの依頼があり、予防教育プログラムを養護教諭、性教育担当主事と共に協議した。毎年エイズ・デイに行われる拡大学校保健委員会（保護者や地域の区長、公民官長、民生児童委員も参加）に参加し、心理面も含めた感染者の状況について話した（高田2000a）<sup>3)</sup>。このT市はかつて文部省（当時）のエイズ教育指定地域であり、市全体をあげて関係者の熱心な努力で感染者との共生、エイズ予防啓発を実践してきた（熊井2002）<sup>4)</sup>。そこに端を発したエイズ教育は根付き、受け継がれている。管理職が先頭に立ち組織として動くことは、予防教育にも大きな実効力を付与するものであると強

著者連絡先：〒370-0861 群馬県高崎市八千代町2-3-6 創造学園大学ソーシャルワーク学部

2004年7月22日受付

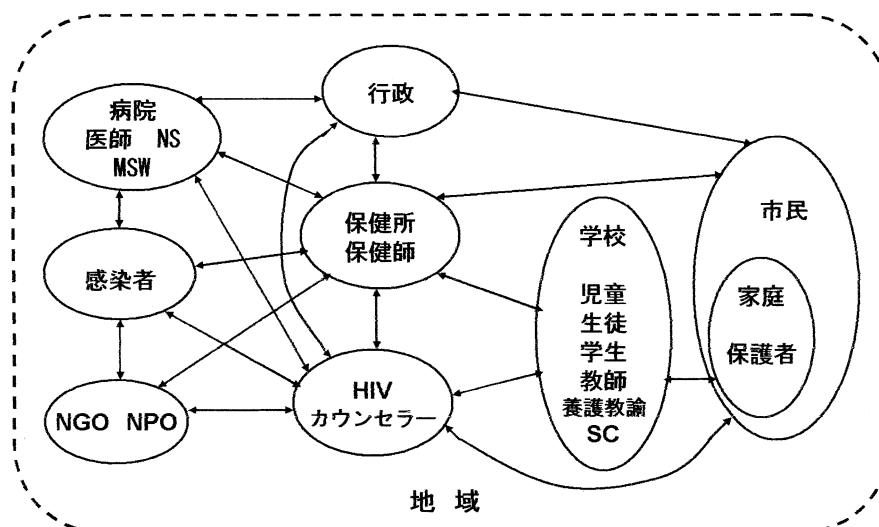


図 1 地域におけるエイズ性教育  
HIV カウンセラーと保健師の協働

く感じている。

### 3) 予防教育に関わる者への支援と連携

臨床心理士会は HIV カウンセリング研修会を開催し、HIV カウンセリングについての研修を提供すると同時に、多職種の出会い、情報交換の機会も提供している。学校現場でも少数である養護教諭等、エイズ・性教育担当者との連携、彼らへのエンパワメントは大きな原動力になると考えられる (高田 2000b)<sup>5)</sup>。

### 3. HIV カウンセラーから伝えていること

筆者がエイズ・性教育講演会で伝えている内容の概略は以下の通りである。①おとなになる準備のため、HIV・エイズについて学習する。② HIV の感染経路、感染後の経過、検査、治療、予防など、HIV・エイズについての科学的知識を持つ。③感染者の置かれた状況を理解し、その気持ちを共感・理解する。④誰かを好きになったら、お互い理解するためによく話しあう。ノーセックスという選択のあることも知る。⑤パートナーができればコミュニケーションを大切に、いざという時コンドームをつけよう相手に言えるようにする。⑥プライベートな行為である性行為は自分でコントロールするしかない。自己コントロールの力を持つ。⑦自分も自分以外の人も大切に。コンドーム使用は自分のため、相手のためである。⑧ HIV カウンセリングについて学ぶ。

HIV カウンセリングは人を大切にする作業である。人は自分が大切にされると、自分自身を大切にしようと思

さらに周囲の人々をも大切にしようとするものである。周囲の人を大切にしたいと思うと、感染させないようにしようという思いや行動が生まれる。それが二次感染防止につながるのである。この点をカウンセラーとして伝えている。

### 4. 考察 今後のエイズ・性教育

#### 1) HIV カウンセラーの視点からの留意事項

筆者は、エイズ・性教育について次の点に留意している。①個々の子どもの発達・人格に配慮し、子どもたちが人権意識を身に付けることを援助する。②感染児者の存在を視野に入れ、人権に十分配慮する。予防を強調するあまり、当事者が傷つくようなことがあってはならない。③科学的な知識に基づいた、HIV を含む性感染症予防スキルの獲得を援助する。④性行動が固定化しないうちに、安全な性行動のスタイルを早期に伝える。⑤セクシュアリティについての理解を援助する。いじめの背景にはセクシュアリティの問題が隠されていることもある。⑥性虐待予防と被害児者へのケアを視野に入れる。Hickling (1996)<sup>6)</sup> が述べるように、性被害にあった場合、子どもたちが自分は何をされたのかを理解し、おとなに伝えることが重要になる。わけもわからず恐ろしい思いをしたというトラウマの体験は人格形成に大きな影を落としかねない。PTSD に発展することもある。その意味でも、言語理解の困難な障害児には、絵や人形などを用いて視覚的に具体的に伝える必要がある。

## 2) 学校でのエイズ・性教育の重要性

① 教師の理解：エイズ・性教育は、教師の理解を得て共に進めることが重要である。筆者は、こちらの思い、意図のみが先走らないように、学校側の要望をまず聞くことから始めている。いくら正当なことを伝えようとしても相手とのチャンネルが合わなければ、我々の声もただの騒音になってしまう。各学校のエイズ・性教育についての成熟度を査定することで、その学校の風土に適切なアプローチ方法を見つけることができる。以前、やや保守的な私立学校で講演をすることになり、露骨な表現は困る等々の注文を事前に受け、筆者もやや緊張気味に話をした。その際コンドーム使用についても話したがその文脈を理解してもらえて、むしろ好意的に受け止められた。各学校の教育方針を尊重しつつ、こちらの思いを伝えていくことが肝要であろう。

② 学校という枠組み：どの社会においても性はプライベートな事柄であり、むやみに話題にすることではない。だからこそ学校という枠組みの中で、真摯な姿勢でエイズ・性について学ぶことが重要である。保護者には、子どもを守る観点から予防教育の内容を理解してもらう一方で、同時に自分の問題としても捉えてもらうことが重要であろう。また不登校の子どもにも情報が伝わるような工夫が必要である。

③ コンセンサスの必要性：大学生に自分の受けたエイズ・性教育について聞いてみると、「熱心な教師がいたので詳しく教えられた」、「全く教えられなかった」と様々である。予防教育が教職員の個人的努力に依存しては、知識のばらつきが生じてしまう。エイズ・性教育について教職員が最低限の共通理解を持っておく必要がある。「コンドームの適切な使用で予防は可能」ということをすべての人々が教えられ、コンセンサスとなっていれば、予防行動が取りやすくなるはずである。

## 3) おとなの責任

未来を担う子どもたちが健やかに成長し、自己実現に向けて進めるよう、健康教育を行うのはおとなの責任である。「寝た子を起こすな」的論議を蒸し返す人々は、性教育により若者の性行動が活発化することを恐れるようだが、木原(2004)<sup>7)</sup>によれば、エイズ・性教育の介入によってセックス経験率が上昇する傾向は認められてはいないのである。性教育の推進に消極的な対策が続けられ、予防可能なのに感染増加が続くならば、木原(2002)<sup>8)</sup>が指摘するように、今後おとなは「不作為の責任」を問われることもあり得るだろう。

## 4) チームで予防教育を

HIVに関わる専門職と教育関係者がチームで予防教育に当たることが必要であろう。地域の予防教育には保健師

と養護教諭、性教育担当教師とが中心となってプログラムを進め、さらに専門職や感染者自身が講師として話をする機会を設けるのが適切ではないだろうか。児童生徒の悩みを受け止める立場にあるスクールカウンセラーにも参加してもらうことは効果的であろう。若者によるピア・エデュケーションの活用も有効であろう。また学校を卒業した社会人向けに保健所が予防教育の機会を提供することも必要であろう。エイズ・性教育は繰り返し実施することが必要である。

謝辞：A市B区の予防教育に当たっては保健師の齊藤有香氏(横浜市鶴見福祉保健センター)、杉山友子氏(横浜市泉福祉保健センター)に感謝いたします。

## 文 献

- 1) 宇野賀津子：エイズ教育を再考する—日本におけるHIV感染者増加の現況から—。現代性教育月報, 2004年1月号, 2004.
- 2) 宮崎 昭：障害児の性。日本心理臨床学会第20回大会自主シンポジウム42「HIV・エイズ教育におけるHIVカウンセラーの役割」, 第9回日本HIVカウンセリング・ワークショップ参考資料集, p63-p65, 2001.
- 3) 高田知恵子：HIVカウンセラーとしてのエイズ教育への関わり—スクールカウンセラー派遣校でのHIVカウンセラーとしての取り組み—。第19回日本心理臨床学会研究発表集, 254, 2000a.
- 4) 熊井佐和子：T市R校におけるエイズ教育への貢献。(野島一彦・矢永由里子編) HIVと心理臨床, 京都, ナカニシヤ出版, p172-p174, 2002.
- 5) 高田知恵子：HIVカウンセリング研修会のあり方について—医療従事者, 教育関係者, 行政担当者からの要望—。第14回日本エイズ学会学術集会・総会抄録集421, 2000b.
- 6) Hickling M: Speaking of Sex Northstone Publishing, 1996 (三輪妙子訳:「メグさんの性教育読本」, 東京, 木犀社, 1999).
- 7) 木原雅子, 他: 若者予防グループ総括: 若者に対するHIV予防介入に関する研究, 1—高校生モデル授業プロジェクト(集団[学校]レベル介入), 平成15年度厚生労働科学研究費補助金エイズ対策研究事業 HIV感染症の動向と予防モデルの開発・普及に関する社会疫学的研究: p181-p198, 2004.
- 8) 木原雅子: 低年齢化した若者の性行動とSTD対策。ペリネイタルケア21(6):24-28, 2002.